

R-18
&Otokonoko

ゴミニチJK



「アムン」(♀)の援交本



+ 説明しよう! ✿

ココアくんとは、ごちうさのココアちゃん
が**男の娘**(ココアくん)だったら?

という体で描かれた**18禁同人誌**で
ありこの同人誌はそのココアくんが**ビッチ**
だったら?

という体で描かれた、**なんだかよく**
わからない18禁同人誌である!!

なんだかよくわからない
18禁同人誌である!! **なんだかよく**
わからない18禁同人誌である!!

なんだかよ

ココアくん本いちらん(×ロブでいたく中)



一巻。ココアくんが頭部から赤い液体を出したり性器から白い液体を出したりする本。



二巻。ココアくんが時間ループに巻き込まれたり性器から白い液体を出したりする本。



三巻。ココアくんがクラリックガンでガン=カタしたり性器から白い液体を出したりする本。



四巻。ココアくんが既知との遭遇をしたり性器から白い液体を出したりする本。この本と同発。

めちやくちや可愛い男の娘と
やれると聞いた我々調査班(二人)は、
高層ビルとコンクリートの街へ向かった。
早速それらしき娘を見つけ、声をかける。



「オッス(Z戦士)」

「君が、ココアくんだね？」

「あっ、ちしこ0721さんですか？」

「はじめまして、ココアです！」

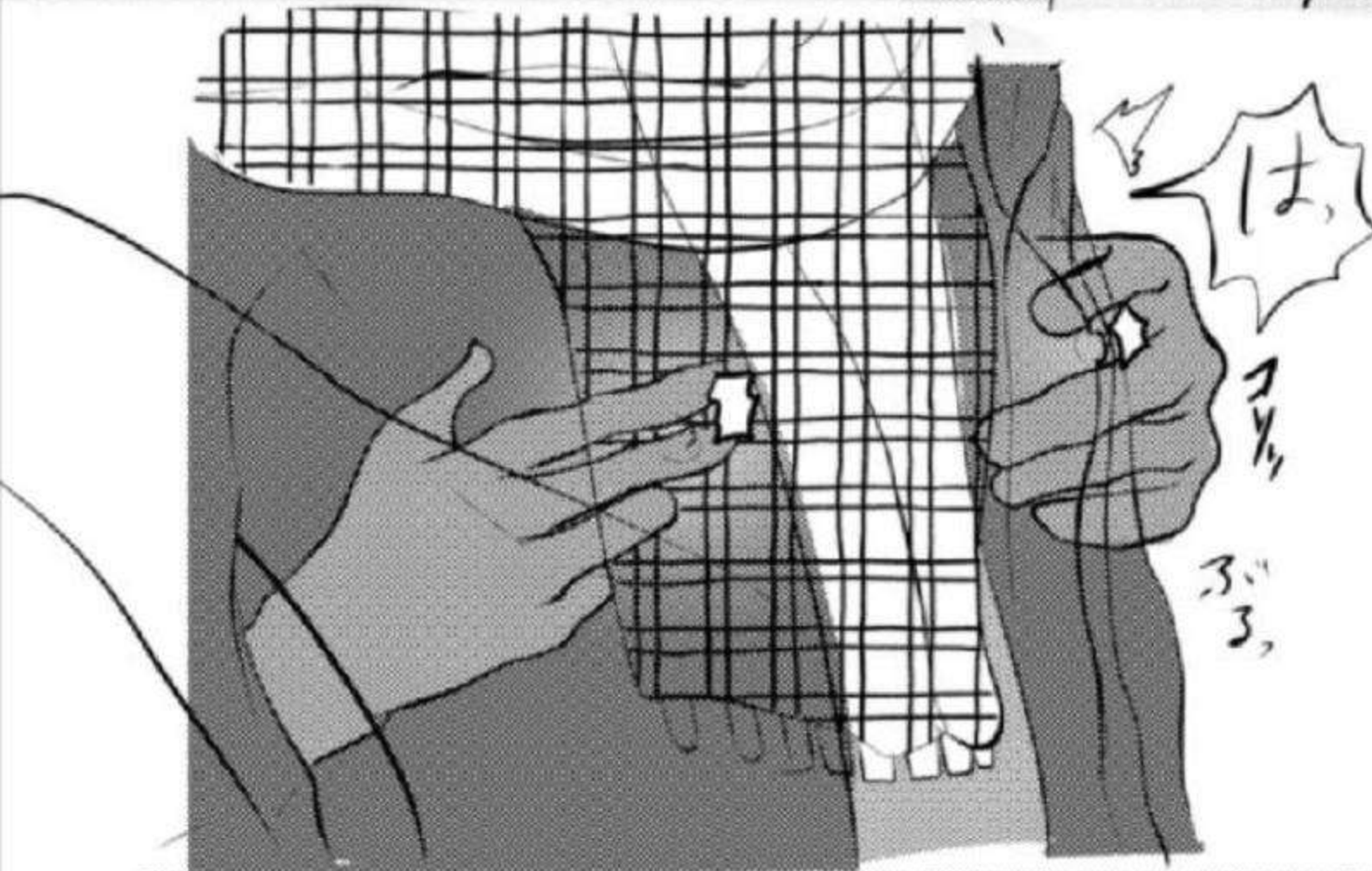


事前に写真をもらわなければ絶対
男とは思わなかつただろう。
女子と見まごうその容姿、まさに
男の『娘』と言った風情だ。



さわわ。

辛抱たまらないとはこの事である。
先走る汁と心が赴くままに、
ぼくは彼の胸を触る。
「やんっ♡」
「う、うごじやまだダメですよあ」
瞳を潤わせて言うココアくん。



嗜虐心を唆らせるその表情にぼくは興奮し、硬くなった乳首をさらにいじる。
「はぐあっ！」
小さな体はそれだけで、面白いように跳ねた。
「あっ……ほ、ホテル行きましようよ」
「このまま外で羞恥プレイとかどうかな？」
じつは色々と道具を」

「ホテルでやるって
言ってるんですから
つべこべ言わず来いホイ」
「はい……」
怒られた。



ホテルにつくなり、彼はぼくの前に跪き、ズボンのチャックを開けた。

一泊四万の

ロイヤルスイートルームである。

「一時間しかないですし、

早速始めましょうか」



んっ

「わっ。意外と大きいですね……」

彼はそう言うと、亀頭に軽く接吻をし、

そのまま少しずつぼくの陰茎を飲み込んでいく。

同時に、白魚のような指が陰囊に添わされる。

やはり陰茎の扱いには慣れていているらしい。

溜まっていた情欲が、一気に下腹部を震わせる。

「ぶはっ……ろうれふか？」

「きもちいいよ……」

「えへへっ、よかったれふ」

ぼくの陰茎を啜えたまま、彼は微笑んだ。

天使やんけ。

「じゃあこのままイかせてあげますね」

「え、いやでもぼくは……おぐっ!?!」

ココアくんは一気にぼくの陰茎を喉奥でしこりあげた。

「ぐっ……♡ぐっ」



「ぐっ……! 馬鹿な、過度な床オナのせいで

慢性的な遅漏になったぼくがこうもあつさり……」

「んふふ、ダテにいろんな人と合ってないんですよ」

「もちろん、休むなんてダメですからね?」

「へ?」



「このまま『時間いっぱい』まで
しほり取りっづけてあげます」
悪魔やんけ。

「1。ろ」

一時間後……

「ぐっ……もう限界だ」

出会った当初は

はちきれんばかりとなっていたぼくの

ちんこも、気づけばしなしなに干からびていた。

「さて、もう時間ですね。じゃあぼくはこのへんで」

ココアくんはそう言って帰ろうとする。

「そ、そんな！挿入は……」

「もう時間切れですよ」

「え、延長するから……」

「かまいませんよ？」

でも、おちんちんの方はもうげんかいないんじゃないですか？

彼の指摘はごもつともだった。

すでにぼくの陰茎は力なく頭を垂れている。

「ぐっ……」



「まあお兄さんは、まだ『もった』方ですよ」

「その言い方……まさか!!」

「ええ……」



「今までたくさんの人と会ってききましたけど、一回も『そうにゆう』させてません♡」

「口淫で限界まで絞り尽くし、挿入は絶対にさせないという事か！」

「そうにゆうOKにすれば、みんなたくさんお金を出してくれるんですよね」

「こうやって、いろんな男から精子と金を搾り取ってきたと言うわけか。」

「可愛い顔をして、なんて悪辣な方法を考え出すのだろう。」

「ぼくは瞳とちんこから大粒の涙をこぼした。」

「でもあきらめるわけにはいかない。」

「ここまでの道で死んでった奴がいる。」

「あいつらの精子は無駄になんかなってねえ！」

「いくつもの精子をかけるごとに」

「俺たちが手に入れられる未来がでかくなってく！」



「止まるんじゃないぞ……」

「はい？」

「延長はして」

「いいんだよな……？」

「もちろんですよ。ただ、そのの」

「そこまでしほりつくしたの」

「で、時間内にもう一回ほっき」

「するのはムリ……」

「ふんぬあー！」

ぼくは、限界を超えて大きく怒張した男根を、ココアさんの目前に突き出した。
「そ、そんな……なぜ……」

信じられないものを見たかのように、彼はへたりこむ。

簡単な事だ。

性欲が止まらない限り、その先に必ず勃起がある。

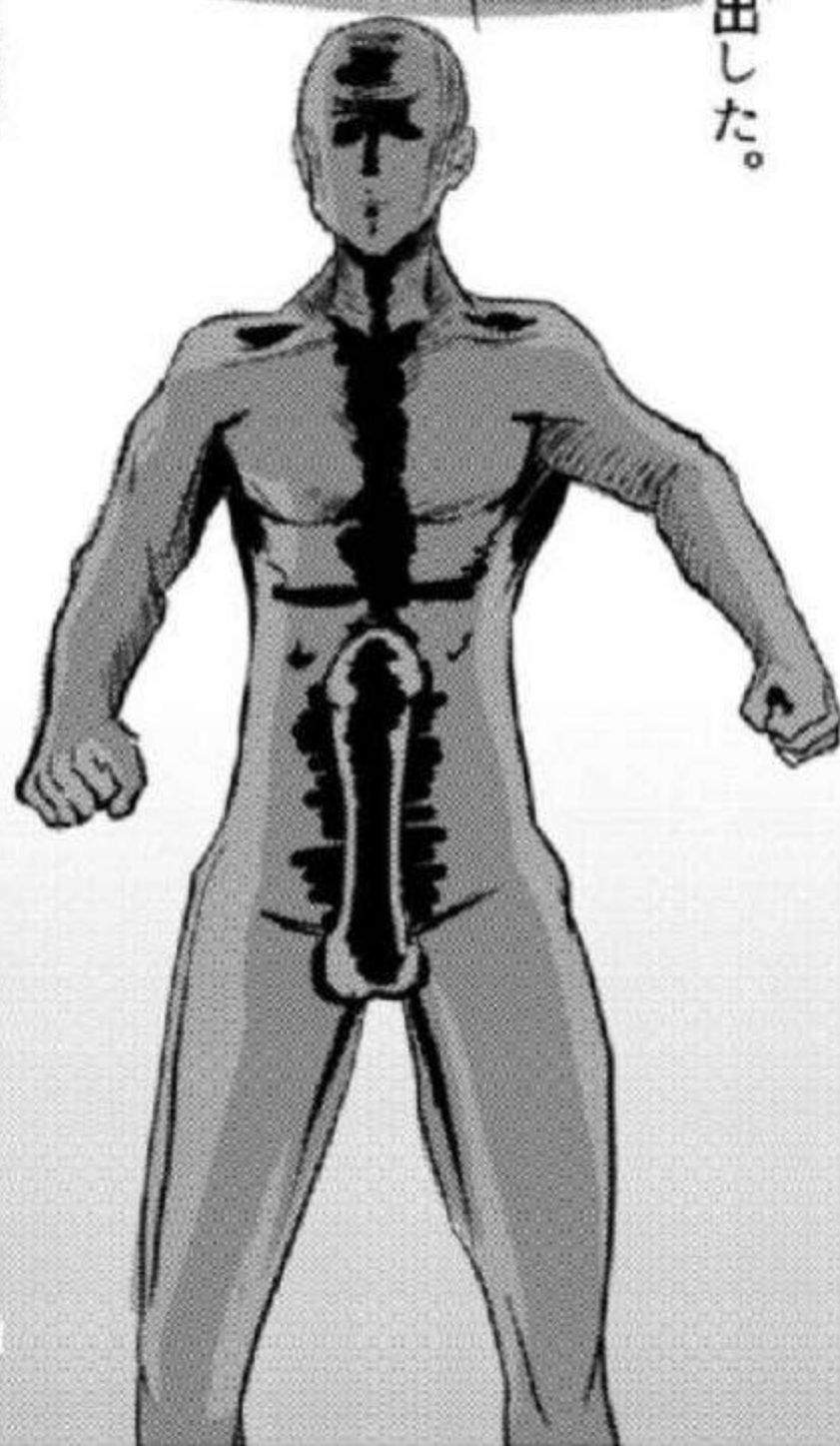
勃起を超越した果ての無い勃起、名付けて「Type果無(はてな)」

ほ、きん



「さあで、九万払って三時間延長だ……」
「ちよ、ちよっと……お金は返すんで」

えんちようはなしに……」



初めてと言うのは本当だろう。

すさまじい抵抗と共に、ぼくの陰茎が彼の穴に入り込んだ。

「がはっ……あがっ……」

「さすがに、いきなりはキツすぎたか……」

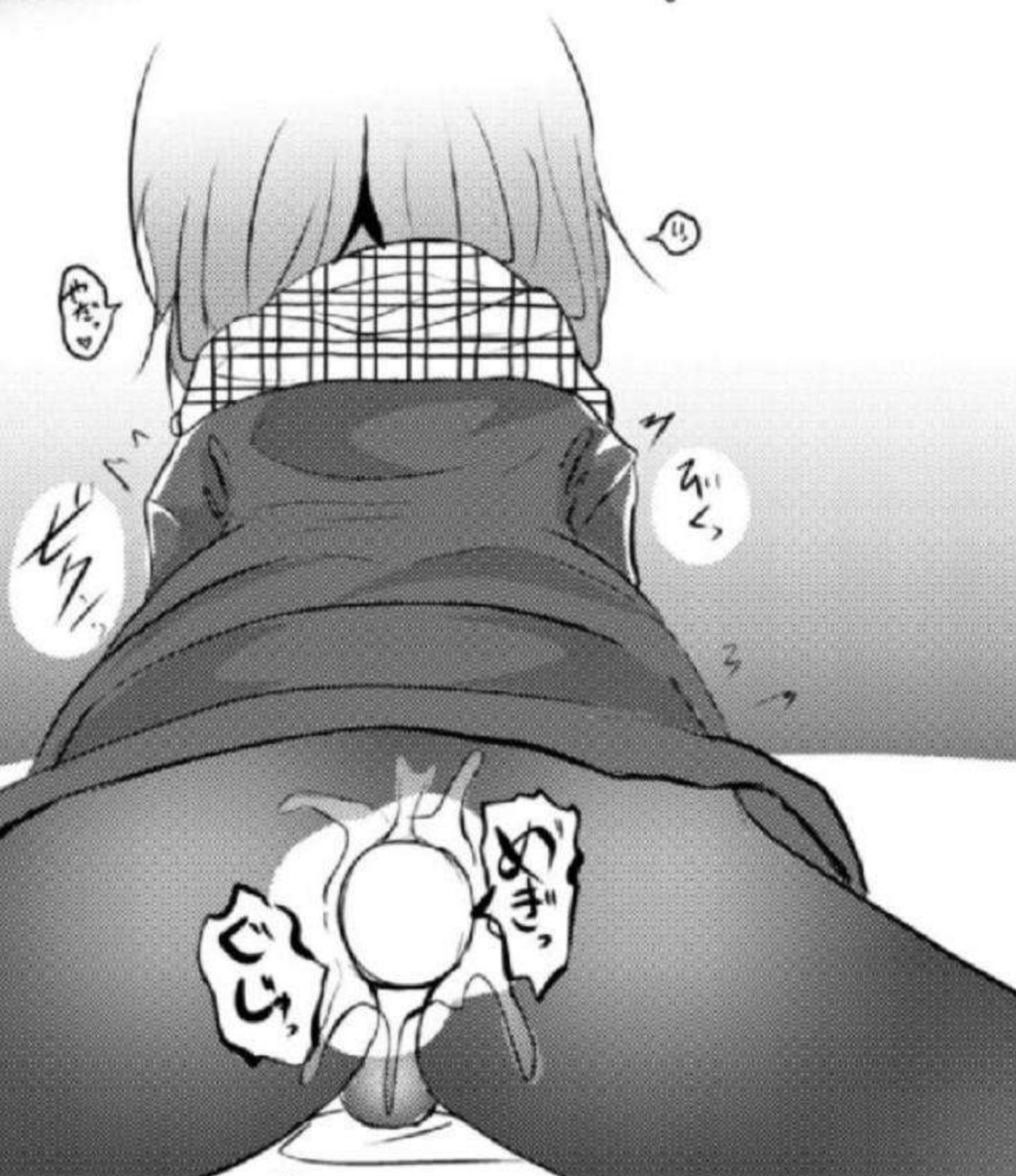
「まあいいや」

ひん

びくん



暴走した性欲は止まりそうにない。
気をやっている彼にかまわず、陰茎で腸内をえぐる。
「あっ……ひっ……えぐっ……」
絞り出したかのようなあえぎ声が、
ココアくんの口端から漏れ聞こえる。





「ごめっ……ごめなひゃっ……もうむひいっ♡」
「いや無理かわかんないだろう！」
「それに謝る相手が違う！」
「今まで騙してきた男達に謝れっ！」
「あっ♡ごめんなひゃいっ♡」
「今までお金をだまし取ってきて
しゅみませんでしたっ♡」

「あぐっ……た、助かつ」
「ぼくは許そう」
「あぐっ……た、助かつ」



かすれてほとんど
聞き取れなかったが、
謝罪はしつかりしたようだ。
ぼくは一度、腰の動きを
止める。



「だがこいつ(ちんこ)が
許すかな！」
「あがあっ！」

散々な蹂躪に裂かれながらも、
ココアくんの腸内は早くもこちらの動きに順応してきたようだ。
腸壁が蚯蚓のようにうごめき、精を搾り取ろうとする。



「さっきまで処女(?)」

だったとは思えない尻穴だ!さすがの淫乱だな!

「はっ……あっ……ひゃっ……」

「射精ろぞ!受け取れ!」
「やっ、やだ!中出しやっ……あああああ!」



三時間後……

全身を白濁に汚したココアくんが、
ぼくの陰茎を掃除していた。

「あつ……かはっ……」

「おらもつと綺麗に掃除しろ」

「は、はっ……」

すっかり堕ちきつたココアくんの様相に、ぼくは満足する。

もう二度と、金をだまし取るような事はしないだろう。

正義は……いや、性義はなされたのだ。

「また近いうちに呼び出すから、

その時までにもつとおしり慣らしとけよ」

「わ、わかりました……ご主人様……♡♡♡」





魚の生け簀

なます

なます

サークル名	魚の生け簀
発行者	なます
発行日	2017/12/31
連絡先	namazuamaashi@gmail.com
Twitter	@namazu4545
pixivID	6097232
印刷	株式会社 ブロス様

